

◇編集後記◇

編集委員長から副委員長の任をお声かけ頂いた際には、最新の情報をいち早く目にする機会に関われる嬉しさのあまり、今にして思えば、多少の浮かれ気分でお引き受けしてしまったのではと反省しています。いざ、副委員長としての業務がはじまると、なによりも投稿される論文の分野の多様性に戸惑ってしまいました。人間工学、毒性学、局所排気装置など工学など、正直に白状すると、これまで自分では読んだことのない分野の最先端の論文が投稿されてきます。しかし、よく考えてみると、研究者としては関わったことがありませんでしたが、産業医として実務を執っていた際には、これらの分野はいずれも日常業務として具体的に対応してきたものでもありました。本号では振動作業に関する包括的なレビューが掲載されています。私自身の経験ですが、巻き込み事故で利き腕を粉碎骨折した方を「はつり作業」に職場復帰させる際に、専門家の助言や資料を探しまわったことを思い出しました。編集委員会の一員として「強制的に」論文を読む機会を頂いたことは、産業保健の実務と研究が連続していることを改めて気付かされる機会になりました。また、JOH 誌、産衛誌に投稿されるこれら多様な論文は、このような産業保健現場のニーズに応えるものであることをこれからも期待しています。

さて、編集に関わるようになって気になっていることをこの場をお借りして2点、述べさせていただきます。一つ目は、和文誌への投稿が少ないことです。研究者の立

場からすると、より読者層の広い、また Impact Factor のある英文誌に投稿したい気持ちは、同じ研究者としてよく理解できます。しかしながら、現場ニーズに応えるためには、当然ながら日本語で情報提供されることが非常に重要です。特に国内の産業保健政策や課題に関連する研究であればなおさらです。JOH 誌、産衛誌は、国内現場への情報提供媒体としての役割と科学的専門雑誌として役割のバランスが必要です。会員の皆さまには、和文誌への積極的な投稿をぜひお願い申し上げます。

二つ目は、編集委員になって初めて知ったことです。投稿されてくる論文のかなりの数が、国外からの投稿です。特に特定の国に関するコメントではございませんが、全体的な印象として、必ずしも投稿される論文のレベルがこちらの期待する基準に達していないと感じることもしばしばあります。多くの会員の皆さまに査読者としてご協力を頂いており、また良質のエビデンスを会員に届けることが期待されていることを鑑みますと、これらの論文の対応には頭を悩ますことも多いです。数ある公衆衛生・産業保健分野の国際誌の中から JOH 誌が選ばれることは大変歓迎すべきことですが、投稿の敷居の低さが質の低さにならないように編集委員会としては留意しています。このためには、会員の皆さまのご協力が不可欠であります。査読依頼が届きましたら、万難を排してお引き受け頂きたいようお願い申し上げます。

(藤野善久)

「産業衛生学雑誌」編集委員会

委員長：益島 茂（三重大）

副委員長：樺田尚樹（国立保健医療科学院）、杉森裕樹（大東文化大）、高尾総司（岡山大）、
玉腰暁子（北海道大）、那須民江（中部大）、西田和子（久留米大）、平工雄介（三重大）、
藤野善久（産業医大）、毛利一平（三重大）、八谷 寛（藤田保健衛生大）

石竹達也（久留米大）、井上和男（帝京大）、植嶋一宗（津保健福祉事務所）、梅津美香（岐阜県立看護大）、小笹晃太郎（放射線影響研）、萱場一則（埼玉県立大）、川口陽子（東京医歯大）、熊谷信二（産業医大）、黒沢洋一（鳥取大）、近藤尚己（東京大）、酒井一博（労働科学研）、佐々木美奈子（東京医療保健大）、菅沼成文（高知大）、田中昭代（九州大）、土井由利子（国立保健医療科学院）、中尾睦宏（帝京大）、中村裕之（金沢大）、馬場園明（九州大）、原田浩二（京都大）、東 尚弘（東京大）、福島哲仁（福島県立医大）、堀口兵剛（秋田大）、丸山総一郎（神戸親和女子大）、三木明子（筑波大）、三宅達郎（大阪歯大）、村田勝敬（秋田大）、八幡勝也（産業医大）、大和 浩（産業医大）、吉田貴彦（旭川医大）、渡邊博且（産業医大）

〒160-0022 東京都新宿区新宿1丁目29番地8 公衆衛生ビル4階

電話 03-3356-1536 ファックス 03-5362-3746 振替 東京 00100-7-133495 番